

上高史さんが言っておられました
が、日本人は「社会性」がまだ完
全に身につけておらず、長年「世
間」で生きてきたと。「世間」は
学校や会社などの直接的に関係の
ある、身近な人々で形成された世
界で「社会」というのは直接的に
は関わりのない人たちがいる世
界。だから、例えばベビーカーを
押している母親がバスに乗ってく
ると、「社会」で生きている人々
なら何人かの人が手を貸そうとす
るのに、「世間」で生きている日
本人は、それを迷惑な行為だとし、
乗ってこなければいいのにと思っ
てしまう。

玉木 異質なものの、自分と関係の
ないものは追い出そうとする。ま
さに「村社会の論理」「世間の論理」
ですね。東京五輪は「多様性と調
和」を理念に掲げ、大坂なおみさ
んを聖火リレーの最終ランナーに
起用しましたが、彼女の黒人差別
に反対する言動に対して日本国内
では、反対するなら大会に出なけ
ればいいという意見もSNS上で
見受けられました。

平尾 それは多くのスポーツ選手

がスポーツ界という狭い世界に囲
い込まれてきたからでしょうね。
少しでも頭角を現したアスリート
は、中学・高校・大学と進む中で、
進学はスポーツ推薦だから勉強し
なくていい、それよりスポーツに
集中しろという世界に囲い込まれ
るわけです。さらに、映画を見た
り、恋愛をしている暇なんかない
だろ、と。とにかくスポーツに打
ち込むことを求められ、年齢と共
に広がるはずの世界が、逆に狭め
られる。しかも、秀でた選手は、
世間から脚光を浴びますから居心
地はいい。そして知らず知らずの
うちに自分の生きている世界から
外側の世界を見ようとする気持ち
を失くしてしまう。

出会う指導者によって違いはあ
るとは思いますが、社会的意見を
言えない、自分の意見を言わない
アスリートが多いのは、こういう
日本のスポーツ界のあり方が生ん
だ結果だと思えますね。

外の社会との繋がり

玉木 一時期はアスリートのセカ
ンドキャリアが話題にされまし

た。スポーツ界を引退した後の第
二の人生をどうするかということ
ですが、最近ではデュアルキャリア
を主張する声に変わってきた。ス
ポーツしながらセカンドキャリア
形成への準備も同時に行うわけ
ですが、古い考えの指導者はいまだ
にスポーツに専念することを主張
しがちですね。

平尾 デュアルキャリアの考え方
は非常に重要だと思います。日本
のアスリートの多くが、スポーツ
で感動を与えたいとか、勇気を与
えたいといった言葉を使いますよ
ね。そういう言葉は、自分が社会
に対して影響を与えることのでき
る存在だと自覚してないと出てこ
ないはず。この自覚があるな
ら、スポーツだけに専念せず、社
会に対する学習もしなければと気
づくべきで、指導者や各競技団体
も、アスリートに社会学習を意識
させるようなアドバイザーを置く
とか、そういう環境づくりが必要
だと思います。

この前、新聞で読んだのですが、
米・NBAは公式HPで「意見を
することは大事。自分の周りの世

界で起きていることにも」と、社
会的な発言を促す動画を流してい
るようです。中間選挙に行こうと
呼びかけ、選挙当日は試合を開催
しないことにしたそうです。

玉木 東京五輪でも以前は政治運
動だと認められなかった人種差別
反対の意思表示も、認められるよ
うになりました。

平尾 そういう機運の中で、社会
から切り離してスポーツに専念さ
せるような指導法は、既に時代錯
誤の行為だと言えますね。

玉木 平尾さん自身、現役時代の
生活は、そういうものでしたか？

平尾 それはやっぱりラグビーに
のめり込む生活で（苦笑）、他の
ことを考える余裕などなかったで
すね。ただ同志社大学の岡仁詩^{とら}先
生の指導を受けた影響は大きかつ
たです。先生は、たとえば試合形
式の練習のときに何度もプレイを
止めて、今のプレイでパスしたと
ころ、もしもパスしてなかったら
どうなった？ その前のプレイで
キックしていればどうなってい
た？ と、いろいろ質問されるん
です。冬の寒空の下で15分以上も